

インターカルチュラル・カフェ 第3回	
開催日時	2023年5月19日(金) 15:00~16:30
テーマ	多様な地域の異文化間教育から考える～北米とオセアニアの異文化間教育から考える～
登壇者	青木麻衣子会員(北海道大学) 塚田英恵会員(一橋大学)
開催状況	
参加者数	総数 32名 ※zoomにアクセスした最大参加者数。
企画運営	企画委員: 伊藤亜希子(全体進行)、渋谷恵(補助)
進行	趣旨説明 各登壇者の自己紹介(研究紹介) ○本日のテーマ 「北米とオセアニアの異文化間教育から考える」をテーマに、塚田会員から「権力を欠いた/帯びた異文化理解—カナダにおける異文化間教育実践から—」について、青木会員から「学校調査と研究倫理—オーストラリア先住民コミュニティにおける調査で考えたこと—」について話題提供をいただいた。その後、渋谷委員と伊藤でチャットにあげられた質問をもとに参加者と話題提供者のやりとりを進めていった。カナダの実践では地域性や先住民の間のポリティクスという要因、異文化理解教育の意義や異文化間教育の目標の設定、先住民にとって意義のある研究とは何を指すのか、など話題は多岐にわたった。さらに、オーストラリアの先住民コミュニティでの研究についてはフィールド調査を行う上での具体的困難が共有された。これらの話題から、研究・実践する者の持つ権力性、マジョリティ対マイノリティという単純な二項対立ではなく、マイノリティ間のポリティクスなどその社会における複層的な権力関係・構造を意識することの重要性が参加者とともにより共有された。
振り返り	○第3回振り返り 第1回のヨーロッパ、第2回のアジアに続き、今回は北米・オセアニアの「異文化間教育」ないし「異文化間教育的」なものとして、カナダとオーストラリアという先住民をめぐっての実践や研究について権力性をキーワードに2名の会員から話題提供を受けた。 今回は広報の段階から、お二人よりメッセージをいただき、それを流したことでより多くの方の関心をひくことができたように思われる。申し込みアンケートに

は、47名の回答があり、回答者の関心については、海外の異文化間教育についてと権力性の大きく2つの傾向が見られた。

青木会員、塚田会員ともにご自身の経験を詳しく共有していただき、非常に内容の濃い話題提供をいただいた。チャットでの質問は2つであったが、それを中心に議論が進められ、深めることができた。時間の関係もあり、参加者の関心も含め、ゆるやかに全体をつなぐ、あるいは俯瞰するような議論は難しかったが、参加者からは「大変勉強になった」「刺激的な内容だった」という声が寄せられ、充実した会になったといえる。

第2回の振り返りで、アフタートークの実施について挙げていた通り、今回はアフタートークも実施した。企画委員、話題提供者を含め9名が残り、チャットのコメントを手がかりに交流し、今回のテーマだけでなくさまざまな内容に15分という短い時間ながら話題が広がっていた。アフタートークはリラックスしたムードで話ができ、実施して良かったと思われる。

○総括

計3回行ったインターカルチュラル・カフェであるが、回を重ねるごとに企画者も前回の反省を活かした運営ができたように思われる。全体を通しての成果として以下の3点を挙げておきたい。

第一に、比較的若手の学会員やここ数年の間に入会した会員に話題提供を依頼したことの影響である。入会して日の浅い会員は、このような形で学会活動に関わったことを非常に喜ばれていた。また、出産や育児で学会活動への復帰が難しかった会員からも声をかけられたことで「自分の研究を気にしてくれる人がいるんだ」と思え、久しぶりに学会活動がでとても嬉しかったとおっしゃっていた。さらに、海外の大学で研究や教育に長く携われ、久しぶりに日本に戻ってきての学会活動で、どのように研究者コミュニティのなかに入っていこうと悩んでいたという話題提供者は、インターカルチュラル・カフェへの登壇でその足がかりをつかめたようである。以上のような機会を提供できたことは、学会としての意義が大きいと思われる。

第二に、非会員へも参加の機会を開いたことである。第1回は話題提供者にも非会員を含んでおり、他学会に所属する研究者も異文化間教育ないし異文化間教育的な営みへの関心があることを会員が知る機会になった。さらに非会員の参加者に対しては、異文化間教育学会の様子を垣間見ていただく機会になった。こうした機会は、異文化間教育学会の存在を周知し、学会大会への参加や学会への入会にもつながるように思われる。

	<p>第三に、異文化間教育研究としてフィールド研究にどのように取り組むのかという情報共有のニーズが示されたことである。海外でどのようにフィールドに入っていけばよいのか、そしてどのような困難にぶつかる可能性があるのか、というリアルなプロセスについて、会員同士で共有する機会が十分でなかったのかもしれない。これはとりわけ第3回実施の際に大学院生の会員と話題提供者のやりとりから見取れた。こうしたリアルな話題提供も、とりわけこれから海外をフィールドに研究してみたいと思う若手研究者のニーズに合うものであると考えられる。こうした機会が学会内で提供されることで、学会員の研究がさらに豊かになることにつながるように思われる。</p> <p>企画委員長が企画を検討する際に、本学会の良さに会員同士の親しみ、垣根の低さがあるということ常々口にしてきた。今回、研究報告とは異なる形の企画を設定したことで、そうした良さが、最近入会した会員や学会活動から遠ざかっていた会員、非会員に伝わり、学会への親近感を増すことに貢献できたのであれば幸いである。</p> <p style="text-align: right;">(文責・伊藤)</p>
<p>アンケート 抜粋</p>	<p>○感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在執筆中の博論とも深く繋がる内容で、大変興味深く聞かせていただきました。研究として机上の空論に陥るのではなく、実際にどう被抑圧者の立場にある先住民族の利益につなげていくか、という視点は非常に大切だと感じました。そのような視座を含めて、更に自身の研究も深めてまいりたいと思います。 ・ 初めて参加させていただきました。「異文化間教育のゴールは何か」「異文化間教育は学生たちに今まで何を教えてきたのか」などの問いがいくつも出てきて、私は何をしようとしているのか、と、自分に引きつけて考える機会となりました。参加してよかったです。ありがとうございました。 ・ とても刺激的な内容だった。世界の多様な地域から日本の学校に来る子供たちの文化的背景を理解する際に、自分たち自身が無意識のうちに持つ構造的権力性に気づいてもらう方法を考えることができました。今日はありがとうございました。 ・ 権力性について考えさせられ、とても参考になりました。 ・ 初めて参加させて頂きました。日本語教師として接している留学生との関わりと比較しながら拝聴致しました。また研究の中で「インタビュー」で聞けないことが増えていく状況が、良いことなのか疑問も感じました。ありがとうございました。

いました。

- ・ 文化の多様性が進む日本社会で大学の教養教育科目として異文化間教育を教えるためのヒントをたくさんいただき、ありがとうございました。特に「コンフリクトフリー」の課題は、学ぶ側にも教える側にもあると漠然と感じていたので、的確な用語と概念を提供していただいたことで、自分なりに整理ができました。
- ・ それぞれの国・地域の現状や困難を知ることができ、とても勉強になりました。また、「こうした研究・教育で公正・正義（ゴール）をどう設定するか」という論点は非常に興味深く拝聴しておりました。とくに教育活動では、教員側に絶えず優位性や権力性が付きまとうと思います。私自身「多様性を尊重せよ」という規範に対して、学生の抵抗感を感じたことがあります。どれだけ社会的に正しいことであっても、大学教員として学生に提示する際には、その言葉が（また別の／教員特有の）権力性を帯びて伝わってしまうこともあるのかな（ゆえに反発が生まれやすいのかな…）とも思いました。色々と知的な刺激を受けました。誠にありがとうございました。

○企画委員会への要望、ほか

- ・ また機会があれば、お知らせくださいませ。
- ・ オンラインでの開催は、参加しやすいです。